

# 1月1日 神の母聖マリア

民 6:22～27 ガラ 4:4～7 ルカ 2:16～21

## 1. ルカ

vv.17-18 「その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。」

イエスの誕生の物語りは、伝記的な目的で書かれてはいません。私たちは聖書から、イエスの家庭の様子や、その生い立ちについての話を聞くことは出来ないのです。そこでは、イエスは本当に生まれたということ(ヨハ 4:2-3、IIヨハ7)と、それが聖霊によるということ(1:35、マタ 1:18)だけが強調されています。初代教会の“洗礼式の信仰宣言”には、おそらくかなり早い時期に“おとめマリアから生まれ”という条項が入れられました。キリストが聖霊によって誕生されたように、人は洗礼において水と霊とによって新たに生まれるのです(ヨハ 1:12-13, 3:3-6)。

ルカ福音書では、“天使のお告げ”が表舞台に登場しますが(1:11-20, 1:26-38, 2:8-15)、実際には聖霊が御子の誕生に関わるすべてのことを導いておられるのであって、それによって新しい“贖いの時”(IIコリ 6:2)が開始されました。そしてそれらのすべては、霊によって判断しなければ理解することが出来ません(Iコリ 2:9-16)。ですから人々は不思議に思い、マリアは心に納めて思い巡らしていました。

## 2. ガラ

神が御子を「女から」生まれさせ、「律法の下にお遣わしに」なったこと、それによって「律法の支配下にある者を贖い出して、神の子となさる」新しい「時が満ち」た、というのが新約聖書の主張です。マタイとルカの両福音書は、御子の母が“おとめ”(παρθένος)であったことを明確に述べていますが、最初期のケリュグマでは「人間と同じ者になりました」(フィリ 2:7)だけが強調されていたようです。

聖母マリアへの“特別な崇敬”(hyperdulia)は、教父たちの時代になって広まったもので(教会憲章 56)、新約聖書の時代にはまだ存在しませんでした。また、“終生処女”という主張も、新約聖書ではまだ現れていませんでした。

ローマ・カトリック教会では伝統的に、“特別な崇敬”(hyperdulia)を“礼拝”(λατρεία)と区別して来ました。教会憲章は、「教会の中に常に存在したこの崇敬は、全く独自のものではあるが、父と聖霊と受肉したみことばとに捧げられる礼拝とは本質的に異なるものであり」と説明し、「母がたたえられることによって、子が正しく知られ、愛され、たたえられ、その命令が守られるようにするのである」(66)と述べています。

プロテスタント側の人々が、マリアに対するローマ・カトリック教会の“特別な崇敬”に対して拒否的である理由は、それが彼らの“聖書のみ”という主張に反するからです。それについて素人が安易に批判することは、控えるべきでしょう。ただプロテスタントの実態は、聖母への“特別な崇敬”を拒否することによ

て、さらに聖書が証言している“処女降誕”にも懐疑的になったり、奇跡や、そして遂には主の復活までもが、“本気で信じる事が出来ない”というような傾向が広がっているのです。

それではカトリック教会の信者は、これを笑う資格があるでしょうか。“特別な崇敬”と“礼拝”とを区別することを知らない、「あらゆる偽りの誇張」(教会憲章 67)による、半ば迷信的な信心に気をつけることは、もっと差し迫った課題であると、気づかなければなりません。“礼拝”(ロマ 12:1)への正しい姿勢、ミサを“礼拝の頂点”(ミサ典礼書の総則 1)として大切にする“行動的参加”が、深い反省をもって一人一人によく理解されなければならないのです。「自分のふところに罪人を抱いている教会は、聖であると同時に常に清められるべきものであり、悔い改めと刷新の努力を絶えず続けるのである。」(教会憲章 8)

### 3. 民

v.27 「彼らがわたしの名をイスラエルの人々の上に置くとき、わたしは彼らを祝福するであろう。」

祝福するのは神であって、祭司自身ではないという事実が、感謝をもって受け入れられるところに、「まことの礼拝」(ヨハ 4:23)があります。ローマ・ミサでは、「主は皆さんと共に」「また司祭と共に」という応答句が何回か出てきます。我が国の典礼刷新の初期の頃に、土屋吉正神父がその著書の中で、「また司祭と共に」と言うときの“司祭”は人のことではなくて、“司祭行為”のことであると教えられました。ですからアクセントを 司祭 と後ろに置くべきだと述べられたのですが、その教えは今は小教区の現場では忘れられたように見えます。

聖母マリアも、「救い主の業に全く独自の方法で協力した」(典礼憲章 61)のであって、私たちの救いはマリアからではなくて、父・子・聖霊なる神から与えられます。そのような従属的なマリアの役割に支えられて、共にミサをささげる会衆が、仲介者・救い主イエスにいっそう親密に一致することが出来ますように。

ハレルヤ、アーメン。

## 1月3日 主の公現

イザ 60:1～6 エフェ 3:2～6 マタ 2:1～12

### 1. マタ

vv.10-11 「学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。」

福音書記者マタイが、当時伝えられていた話の数々を、独自の立場から脚色して編集した意図は、恐らく彼が司牧している共同体の信仰のためでありました。その信仰とは、御子の誕生によって新しい時代、すなわち“終わりの時”(使 2:17)が始まったということです。

この“終わりの時が始まった”ということを示すような兆候に、ヘロデ王は不安を抱きました。ヘロデ王は当時の世の権力者の一人でした。それと対照的なのが、東方から来た学者たちです。学者(マゴス)という呼び名は、人々から偉大な者と見られていて、良い意味の場合は“学者”ですが、悪い意味のときには“魔術師”(使 8:9-11, 13:6 他)と訳されます。人々から尊敬される“権威ある学者たち”が、新しい時代の開始に「喜びにあふれ」、幼子を礼拝しました。

私たちの時代にも、世の中を良い方向に導いてくれる偉大な学者たちがいますが、同時に怪しげな理論で大衆を迷わせるような学者もいます。いつの時代にも、両方の種類の“学者・知識人”が存在していて、それぞれが世の中に影響を与えているのです。キリスト教界とて、例外ではありません。

預言者たちが待ち望んでいた“新しい終末の時代”(Iペト 1:10-12)が、今や始まったということを説明するために、マタイは旧約聖書からの引用を用いました(1:22, 2:5, 15, 17, 23)。しかし私たちにとって、学者たちの礼拝の物語りは、むしろ“異邦人がユダヤ人と共に神の国に集められる将来”への期待を語る預言そのものでもあります。

### 2. エフェ

教会は、今朝の集会祈願が示しているように、公現の祭りを古くから、救い主が異邦人に示されたことの記念と見なして来ました。それは教会の大切な、信心の富であると言って良いでしょう。しかし聖書は、異邦人がユダヤ人と共に神の国に集められることを、将来への期待として語っているのです。それが「秘められた計画」(v.3)と呼ばれているものです。

教会は御子の誕生によって、決定的に新しい時代に生きている民です。「古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。」(IIコリ 5:17) しかしそのことは、現代が「秘められた計画」の中にある時代だということであって、決して福音書のイエスの物語りがただの昔話になってしまったということではありません。

今や教会が神の国の相続人である(ロマ 8:17)ということは、異邦人がユダヤ人と一緒に“イスラエルへの約束”(2:11-13)にあずかること、そしてそれが「秘められた計画」なのだという理解(v.6)を、主の公現の

祭日の朗読配分は私たちに訴えているのです。

ことばの典礼における聖書朗読は、信仰の命に関わるほどに大切なものです。しかし実際には、多くのカトリックの子らの心には覆いが掛かっています。私の“聖書の学び”は、この覆いを取り去ること、主の方に向き直るための(II コリ3:12-18)助けを提供する、ささやかな奉仕なのです。

### 3. イザ

このイザヤ書のテキストが朗読されるのは、v.6に「黄金と乳香」の献げ物が出てくるからでしょうか。東方の博士たちの来訪が、この預言の実現であったというだけの理由によるのでしょうか。

vv.1,2,3の「あなた」は、カトリック教会のことだと、安易に理解されてはいはしないでしょうか。

前後関係を見れば分かるように、イザヤの預言ではこの「あなた」は、60:14の「主の都、イスラエルの聖なる神のシオン」のことです。

新約聖書は、「わたしたちはこの地上に永続する都を持っておらず、来るべき都を探し求めているのです」(ヘブ13:14)と語りました。「新しいエルサレム」(黙21:2)こそは、イザヤの預言の真の主題です。ですから主の公現の祭日は、カトリック教会の信者にとっても、この組織の外にいるキリスト者にとっても、異邦人がユダヤ人と一緒に約束されたものを受け継ぐ日を仰ぎ見る、期待の祭日なのです。

ハレルヤ、アーメン。

## 1月10日 主の洗礼

イザ 40:1～11 テト 2:11～3:7 ルカ 3:15～22

### 1. ルカ

v.16 「その方は、聖霊と火であなたたちに洗礼をお授けになる。」

差し迫った神の怒りの火(3:7)に直面するイスラエルの民衆と共に、イエスもヨハネから洗礼をお受けになりました。この方は、裁きの火(マラ 3:2)、裁きの霊と焼き尽くす霊をもって(イザ 4:4)、御自分の民を贖う“僕なるメシア”として(イザ 42:1-4, 52:13-53:12 参照)、この日、聖霊によって油を注がれました(使 4:27, 10:38)。罪のない神の子が、なぜ“罪の赦しを得させる悔い改めの洗礼”(3:3)をお受けになったのでしょうか。それは御自身が私たちに代わって、悔い改めの洗礼を受けることによって、全世界の罪を償ういけにえとなるためでした。ですからそれは最後に、十字架の洗礼(12:50)に至るものであったのです。

「わたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた。」(イザ 53:6) 私たちキリスト者にとってかつての洗礼の日が、“聖霊によって新しく生まれた”(テト 3:5)日であるように、キリストはこの日の洗礼によって、父の愛する子、“僕なるメシア”として、いわば秘跡的に誕生されたのです。

### 2. テト

v.5 「神は、わたしたちが行った義の業によってではなく、御自分の憐れみによって、わたしたちを救ってくださいました。」

恐らく vv.4-7 は、v.8 の「この言葉は真実です」を伴って、原始教会における洗礼式の式文として用いられていたものを、パウロがここに引用したのであろうと推測されます。

18世紀に登場した啓蒙主義以来、キリスト教とはイエスの“教え”に従うことであるという考え方が、世界に広がりました。イエス主義、あるいはキリスト主義のようなものが、“イエス・キリストへの信仰”に取って代わるようになりました。

しかし、イエスがヨハネからお受けになった“洗礼”、またイエスが御自分の死を指して言われた“洗礼”という言葉は、単なる比喩ではありませんでした。マコ 10:38 の「わたしが受ける洗礼」も、ルカ 12:50 の「受けねばならない洗礼」も、それはキリストの贖いの死を指していました。

全世界の罪を償ういけにえとして(Ⅰヨハ 2:2)、ゴルゴタで十字架につけられたイエスの死に、すべてのキリスト者は洗礼の秘跡によって結ばれました。「それは、キリストが御父の栄光によって死者の中から復活されたように、わたしたちも新しい命に生きるためなのです。」(ロマ 6:4)

こうして私たちは、“永遠の命を受け継ぐ希望”(3:7)を与えられました。ですから教会は、「祝福に満ちた希望、すなわち偉大なる神であり、わたしたちの救い主であるイエス・キリストの栄光の現れを待ち望むように教えています。」(2:13)

教会は、“キリストの教え”という論理的に構成可能な一つの主義をかかげて歩んでいる教団ではありません。そうではなくて、「望んでいる事柄を確信し」(ヘブ 11:1)、「目に見えないものを望んで」(ロマ 8:25)、「目に見えるものによらず、信仰によって歩んでいる」(II コリ 5:7)神の国の相続人なのです。

### 3. イザ

第二イザヤと呼ばれるイザヤ書 40～55 章に集められた預言集のうち、その初期の預言が語られ始めたのは、長い捕囚の期間が今や終わろうとしている頃でありました。ペルシアの王キュロスのバビロン征服 (B.C.539)を目前にして、イスラエルの民は捕囚を解かれてユダヤに帰還する日を、息詰まる緊張をもって待望していました(歴下 36:17～エズ 1:4 参照)。

v.1 「慰めよ、わたしの民を慰めよと、あなたたちの神は言われる。」

捕囚期以前の預言者が、主として歴史の審判を告知したのに対して、彼は歴史の救済を預言しました。「苦役の時は今や満ち、彼女の咎は償われた」からです。しかし私たちの理解が、今朝の朗読テキストだけに止まるなら、これが主の洗礼の祝日の朗読配分に割り当てられている理由を知ることは出来ません。

第二イザヤにとって捕囚の民の解放は、地の果てのすべての人々に主の救いが輝き出る (45:22)歴史の転換を意味しました。「天よ、露を滴らせよ。雲よ、正義を注げ。地が開いて、救いが実を結ぶように。」(45:8, 典礼聖歌 301) そして、彼が最後に到達したのが“僕の歌”(42:1-4, 49:1-6, 50:4-9 52:13～53:12)でありました。

「彼の受けた懲らしめによって、わたしたちに平和が与えられ、彼の受けた傷によって、わたしたちはいやされた。」(53:5, I ペト 2:24) 私たちの主はこの日、御自身の洗礼によって、“主の僕なるメシア”としての歩みを始められました。そして、ゴルゴタの十字架の死によって、“ただ一度”、永遠の贖いを成し遂げてくださったのです。(ヘブ 9:12)                      ハレルヤ、アーメン。

## 1月17日 年間第2主日

イザ 62:1～5    Iコリ 12:4～11    ヨハ 2:1～11

### 1. ヨハ

v.11 「イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」

この“カナでの婚礼”の物語りは、一見すると淡々と語られていて、聖書には無知な人でもこの物語りだけなら“よく分かる”ように見えます。ただし、v.11を除いて……です。

ヨハネ福音書では、イエスの公生涯およびその死と復活が意味するものを指し示す、そのようなイエスの行為を、“しるし”と呼んでいます(2:18, 6:26, 11:47)。ですから、お目出度い婚礼の最中に「ぶどう酒が足りなくなった」(v.3)という事態に、花婿に恥をかかせないようにイエスが助け船を出した話だと、安易に考えるべきではないのです。

「わたしの時はまだ来ていません」(v.4)というイエスの返答から、“しるし”が主の死と復活を通して栄光を受ける“時”(12:23,27, 17:1)を指し示すものだという、ヨハネ福音書の理解を読み取ることが出来ます。“石の水がめ”(v.6)が象徴するユダヤ人の律法主義が、イエスの登場によって福音に「変わった」(v.9)と、この物語りは語っているのです。神の国の婚宴(マタ 22:1-14, 25:1-13)に喜びをもたらすぶどう酒は、「御国の福音」(マタ 9:35)にふさわしい象徴であります。

### 2. Iコリ

v.7 「一人一人に“霊”の働きが現れるのは、……」

福音書が語っているように、最初弟子たちはイエスの語られる福音をよく理解出来ませんでした(マコ 4:41-42, 5:32)。主の復活と聖霊降臨の後に、初めて彼らは聖霊に導かれて福音の真理を理解したのです(ヨハ 14:26, 16:12-15)。彼らの信仰は明確に、神が主とし、またメシアとなさったイエス(使 2:36)に向けられました。彼らにとって“福音を宣教する”とは、「時は満ち、神の国は近づいた」(マコ 1:15)と語ること、そして「福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力である」(ロマ 1:16)と告げ知らせることでありました。

福音を宣教することも、それを聞いて理解することも、一人一人への聖霊の働きによるのです(12:3)。しかも教会は、その全体が「福音にあずかっている」(フィリ 1:5)共同体であることを目指しています。

v.7 「……全体の益となるためです。」

福音宣教の、何よりも第一で最も必要な対象は、教会自身です(Iコリ 9:27)。世間では“賜物”(v.4)という言葉がタレントと訳されて、個人個人の能力や可能性を大切にするという考え方に結びついて行きます。

しかし、聖書がここで語っているのは、“聖霊の賜物”であって、単なる個人の能力や特技のことではありません。

ですから私たちキリスト者は、「霊的な賜物」(12:1)を大切に考えましょう(12:31)。それは私たちが“神の子に対する信仰と知識において一つのものとなり、……キリストの体を造り上げてゆく”(エフェ4:12-13)ことを可能にする賜物だからです。

### 3. イザ

「若者がおとめをめとるように、……花婿が花嫁を喜びとするように」(v.5)、神は「御子の血によって御自分のものとなさった神の教会」(使20:28)を顧みておられます。

v.1 「シオンのために、わたしは決して口を閉ざさず、エルサレムのために、わたしは決して黙さない。」

福音の宣教という奉仕の業は教導職に任せて、信者は別の面で働けばよいという考え方が、永らく教会に定着して来ました。そして実際には、聖伝と聖書を学んで自ら福音を理解するということにも、ほとんどの信者は不熱心であったというのが事実です。しかし、それは間違っています。

福音を宣べ伝える人がいるところには、それを聞いて理解し、信じる人がいなければなりません。そうでなければ、“救い”はただの画餅になってしまいます。信者一人一人が福音を聞いて信じ、キリストの救いを受けているなら、その場合にはどうして口を閉ざし、黙しているなどということがあり得るでしょうか。

神が教会を愛して、教会を喜びとしてくださっている、その愛と喜びに、私たちも与る者になろうではありませんか。一人一人が「分に應じて働いて」(エフェ4:16)、霊的な賜物に感謝しようではありませんか。

ハレルヤ、アーメン。



## 1月24日 年間第3主日

ネヘ 8:2～10    Iコリ 12:12～30    ルカ 4:14～21

### 1. ルカ

vv.14-15 「イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。…… イエスは諸会堂で教え、……」

v.21 「“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した”と話し始められた。」

マコ 1:15 が伝えている通り、イエスの宣教は“時が満ちて、約束された救いが到来した”という告知をその内容としていました。ルカ福音書は、イエスがナザレの会堂でイザ 61:1-2 を朗読されたとき、明らかにこれを御自分に当てはめて、“神は貧しい人に福音を告げ知らせるために、わたしに油を注がれた”と語られたことを伝えています。人々を救いへと招く神からの福音が、まさに語られ、聴かれたのです。

イエスと弟子たちによる宣教は、それに伴う奇跡と共に、神の国が近づいたことの“しるし”でありました(マタ 10:7-8、ルカ 10:9)。イエスはこれを預言されていたメシア時代の到来の“しるし”であると説明されました(マタ 11:5、ルカ 7:22)。

ですから、新約聖書の理解によれば、教会の宣教それ自体が“約束された救いの時が到来した”ことの“しるし”であり、教会はこの宣教によって、天からの“真のしるし”を全世界に告げ知らせ続けるのです。

このことから、教会の宣教の“終末的な性格”が明らかになります。私たちのミサで、“ことばの典礼”は必ず信仰宣言で締めくくられ、一同は“主は、生者と死者を裁くために、栄光のうちに再び来られます”と唱和します。“感謝の典礼”では、記念唱で「主の死を思い、復活をたたえよう、主が来られるまで」と歌い、主の祈りの副文で「わたしたちの希望、救い主イエス・キリストが来られるのを待ち望んでいます」と唱えます。

### 2. Iコリ

v.13 「皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊を飲ませてもらったのです。」

洗礼を受けるには信仰が必要ですが、新約聖書はその信仰を、福音を聞くことと固く結びつけて理解しています(エフェ 1:13、ロマ 10:14-17)。私たちはカトリック教会の典礼刷新によって、“ともにささげるミサ”という考え方を学びました。それは新約聖書が教会を、“共に福音を聞く一つの体”であると理解していることと、切り離すことが出来ません。

“信仰は、(福音を)聞くことによって始まる”(ロマ 10:17)というのが、パウロを初めとする新約聖書全体の主張です。信仰とは、キリストの福音の宣教によって引き起こされる応答であって、神からの救いへの招きに従うことだからです。

旧約聖書において“聞け”(申 6:4)が“聞き従え”(申 11:13)を意味しているように、同様に新約聖書の“聞く”も“福音に聞き従う”(IIテサ 1:8)ことなのであって、教会とは“福音への従順”(フィリ 2:12)において

一つである、そのような“キリストの体”(v.27)なのです。

### 3. ネハ

祭司エズラがバビロンからエルサレムに上って来た理由は、「神の律法に従ってユダとエルサレムの事情を調べること」(エズ7:14)、すなわち“モーセ五書”(創、出、レビ、民、申)を民に教えることによって、ユダとエルサレムの宗教的秩序を回復することでした。律法はエズラによって、「理解することのできる年齢に達した者に向かって」(v.3)読み上げられ、「人々はその朗読を理解」(v.8)しました。

「民は皆、律法の言葉を聞いて泣いていた」(v.9)と書かれています。彼らはこれまで律法にあまりにも無知であったために、“律法に聞き従わない者への罰”を読み聞かされて驚き、悔いて涙を流しました。

“信仰は、(福音を)聞くことによって始まる”という、いわば当然の事実、今日のカトリック教会はもう一度立ち帰らなければなりません。“聖書の朗読とその説教を聞いて、会衆は泣いていた”ということが、私たちの間でも現実にならなければならないのです。そのように朗読され、そのように説教され、そしてそのように聴かれているだろうか、真剣に考えてみましょう。

主の恵みと憐れみによって(1テモ1:2)、私たちの間でも、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」との御声を、確かに聞くことが出来ますように。

アーメン、ハレルヤ。

## 1月31日 年間第4主日

エシ 1:4-5,17-19    Iコリ 12:31~13:13    ルカ 4:21~30

### 1. ルカ

v.21 「そこでイエスは、“この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した” と話し始められた。」

イエスと共に、“時が満ちて、約束された救いが到来した” という、神からの福音が“わたしたち”(1:1-2)を訪れました。この「神の国の福音」(4:43)は、新約聖書独特の用語法で「秘密」(8:10, ロマ 16:25)と表現されています。それは、「この約束が、イエス・キリストへの信仰によって、信じる人々に与えられる」(ガラ 3:22)のものであって、この信仰がないところでは「理解できない」(8:10)ままに留まるからです。

「目の見えない人に視力の回復を告げ」(4:18)というイザヤの預言が、イエスの到来によって実現した“しるし”を、私たちが信仰によって読み取ることを期待して、新約聖書は物語っています。なぜなら、教会は“信じて救われた”(ガラ 2:16, エフェ 2:8)者たちの共同体だからです。信仰によって私たち信者は、「目の見えなかったわたしが、今は見える」(ヨハ 9:25)とすることが出来るのです。

しかし、信仰のないところでは状況は一変します。「わたしたちが見てあなたを信じることができるように、どんなしるしを行ってくださいますか」(ヨハ 6:30)、…… そんなしるしを「郷里のここでもしてくれ」(v.23)と言う人々の間では、福音は理解されず、イエスは決して受け入れられません。そこでは、「目の見えない人は見え、…… 耳の聞こえない人は聞こえ、…… 貧しい人は福音を告げ知らされている」(7:22)という“しるし”が“秘密”のままに留まるからです。

“洗礼を通してその中に入れられ、キリストに結ばれた人々の共同体である教会”(教会憲章 14)は、信仰によって成り立っています。私たち信者はもう一度、自分が単にカトリックという組織に所属しているだけなのか、それともイエス・キリストへの信仰を共有しているのかを、真剣に考えて見る必要があります。

### 2. Iコリ

v.13 「それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つはいつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である。」

私たちにあって信仰とは“イエス・キリストへの信仰”であり、希望とは“神の国の希望”です。それでは愛は……？ これを二つの面から説明することが出来ます。

先ず第一は“福音への愛”です。イエスは「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われました(マコ 8:34)。これを、人がイエスのような犠牲の精神を持って世の中に奉仕することだと考える人もいます。しかし聖書は、“世の中のため”とは言わず、イエスが「わたしのため、また福音のため」(マコ 8:35)と言われたことを伝えていきます。イエスが言われた「わた

しのため」(マタ5:11)とは、言うまでもなく“キリストの福音のため”であることは明らかです。“福音は難しく分からないが、愛なら何となく分かる”と言う人は、残念ながらまだ“信仰の人”ではありません。

第二は“教会への愛”です。「互いに愛し合いなさい」というイエスの言葉は、この教会共同体の同志的団結のことであって、“洗礼を通してその中に入れられ、キリストに結ばれた人々の共同体である教会”を目指しています。「キリストはその兄弟のためにも死んでくださったのです」(ロマ14:15)ということが、愛に従って歩む理由です。それは「教会を造り上げる」(Iコリ14:4-5,12,17,26 他)という実を結ぶはずのものなのです。

### 3. エレ

v.19 「わたしがあなたと共にいて、救い出すと主は言われた。」

このエレミヤに語られた主の言葉から、私たちは何を連想するでしょうか。原理主義的な教派の人々なら、彼らの布教活動をカブける大胆な励ましを聞き取るかもしれません。しかし私たちは明らかに、今朝の福音朗読において“人々の間を通り抜けて立ち去られたイエス”(ルカ4:30)を、想起しないではいけないのです。

人々の不信仰や、いろいろな対立する主義主張という隔ての壁を取り壊し、「遠く離れているあなたがたにも、近くにいる人々にも、平和の福音を告げ知らせる」(エフェ2:17)イエス・キリストが、私たちの“ともにささげるミサ”のただ中に力強く立っておられます。そして、「この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した」と語っておられるのです。神に感謝！

アーメン、ハレルヤ。